

デリダ、ジャック『アーカイブの病』福本修訳、法政大学出版局、1995、2010.

・アーカイブとは、自然と法の規範に関わり、それを脱構築的に考察する上で精神分析は不可欠。

・『暴力論批判』のベンヤミンでは、アーカイブ化は、法権利を創設しかつ保守する力の暴力といえる。

・活字印刷に関わる。そこではアーカイヴの概念は、自分の概念により一致しているように見える。なぜならば、それが託されているのは外側に、外的な記録媒体にであって、割礼における契約の徴の様に秘部の跡に、いわゆる固有の身体にじかにではないからである。しかし、外側はどこから始まるのだろうか。この問いこそ、アーカイヴの問いである。(10)

・死の欲動は、フロイト自身の非常に重要な言葉によれば、攻撃欲動であり破壊欲動でもあるので、それは忘却へと、記憶喪失へと、ムネーメー（生きた記憶）としてであれアナムネーシス（想起）としてであれ、記憶の消失へ取り立てるばかりでなく、ムネーメーにもアナムネーシスにも決して還元できないもの、つまりヒュポムネマ（覚書）すなわち記憶術的補足や代理、補助、備忘録といった、アーカイヴ、記載、記録あるいは碑の装置の、根本的な削除を、実際には根絶をも命令している。なぜならアーカイヴは、もしもこの語または比喩が何らかの意味作用に安定化するならば、それは決して、自発的で生き生きとした内的経験としての記憶でも想起でもないだろうからである。まったくその逆で、アーカイヴは当該の記憶の根源的で構造的な欠陥の代わりに生じるのである。(17)

・フロイトの、内的なアーカイヴ化としての記憶を外的に表現する用途をもった、工作機械の技術モデルについて、すなわち不思議のメモ帳について。(20)

・郵便による書簡と電子メールの差異について(26-29)

・字はウ的な記憶と区別される心的アーカイヴ、つまり、ムネーメーともアナムネーシスとも区別されるヒュポムネーシスという考え。それは結局、内部の人口補助器具の創設である。(29)

・碑文。